

日本統治期の台湾における近代女性イメージ構築

—1930年代の『台湾婦人界』および『台湾愛国婦人』における女性表象の比較から—

神戸大学 藤岡達磨

目的

本報告は、日本の植民地統治下にあった台湾で発行された女性誌の女性表象を材料として、植民地における女性イメージの構築過程における、国民国家への動員と自立した個人を称揚する消費文化の葛藤と混淆について、分析を行うものである。東アジアにおける近代化過程の中で行われた文化政策（例えば近代女子教育）は、伝統的な女性像を打破することによって、新しい女性像の構築を目指した（Xu Qing 2016）と言われる。しかし、この新しい女性像の構築は、単一的に進行したわけではない。従来日本における女性像の構築の研究では、「家」への献身という回路を通じて国家への動員を図るという「良妻賢母」、国家への国民としての献身を志向する「愛国婦人」、経済的自立と個人化を志向する「モダンガール」の間の対立が指摘されてきた：例えば、女性知識人である平塚らいてふによる銀座の「モガ」への否定的なコメントがある（平塚 [1927]1983）。そこで本報告は、日本統治時代の台湾における女性誌の記事について、日本植民地統治下にあった台湾における新しい女性イメージの構築における政治学について検討する。

方法

1930年代の『台湾婦人界』および『台湾愛国婦人』の記事について、日本における女性像構築の対立（モガ/新しい女）を背景に、植民地的な統制、国民としての動員、伝統社会におけるジェンダー関係、国際的なジェンダー化された商品を通じた女性像の構築などの諸要素の結び付きと葛藤について分析を行う。

結果

普遍的近代人として社会に参画しようとする主体としての女性像、生産領域から切り離され私生活領域の中で再生産を期待される母性としての女性像、社会領域から隠蔽されたゆえに価値を増した性的な主体としての女性像の三種の女性像の分断と、それゆえに実現されない女性像の確立の試みを見出すことができた。

参考文献

- Xu Qing, 2016, “Shanghai Modern Girl and Toa: Ailing Zhang and Xiangran LI”, 『文明 21』(37), 愛知大学国際コミュニケーション学会
平塚らいてう, [1927]1983, 「かくあるべきモダンガール」, 『平塚らいてう著作集 第4巻』, pp.290-297, 大月書店